山間の縄文集落

起し又遺跡

姉川の最上流。手が届くと思えるほど近くに岐阜県境の尾根が見える山間に遺跡はあります。標高約425m。姉川の支流・起し又川が作り出した左岸段丘上に営まれた、縄文時代中期(約5,000年前)から後期(約4,000年前)を中心とした遺跡です。

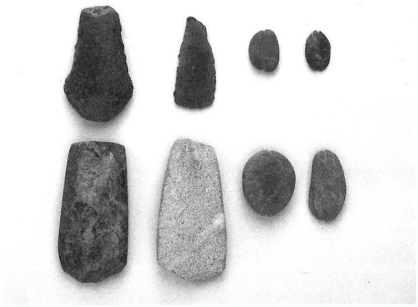
調査では、５棟の竪穴住居のほか、柱状の石を添えて土器を埋設した遺構、円礫を並べた配石遺構など、縄文時代の生活や精神文化をうかがわせる遺構群が発見されました。出土した土器には、早期(約8,000年前)や晩期(約3,000年前)の土器があることから、縄文時代を通じて人々の活動があったようです。とくに中・後期には、東海、中部、西関東や近畿、瀬戸内の土器群と、伊吹山麓の在地の土器が入り交り、複雑な交流を見せています。

この時期、伊吹山地周辺には、醍醐遺跡や古橋遺跡(ともに長浜市)のように、起し又遺跡と同じような土器や石器、配石遺構を伴った集落が営まれており、ひとつの小文化圏があったようです。この地域は、日本の東西を結ぶ重要な位置にあります。これらの村々は、東からの文化が近畿地方へ流入するときの窓口的役割を果たしながら栄え、なかでも起し又は、まっさきにこれを受け入れた村でした。

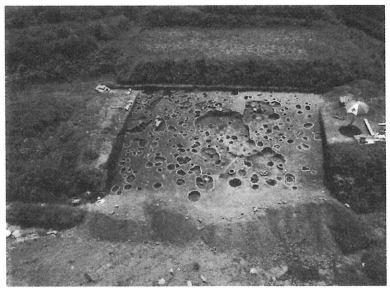
竪穴住居跡

平成24年度 市内遺跡保存活用事業

起し又遺跡や醍醐遺跡、古橋遺跡からは、石錘（せきすい）とよばれる漁網の石のオモリがたくさん出土し、盛んに川魚漁がおこなわれていたことがわかります。また、住居跡からは、トチの灰汁（あく）抜（ぬ）きに使われたと考えられる炉跡（ろあと）も見つかっています。トチを加工する技術と、石錘を使った漁労技術の確立が、山間の縄文集落を支えていたと考えられます。



石斧・石錘

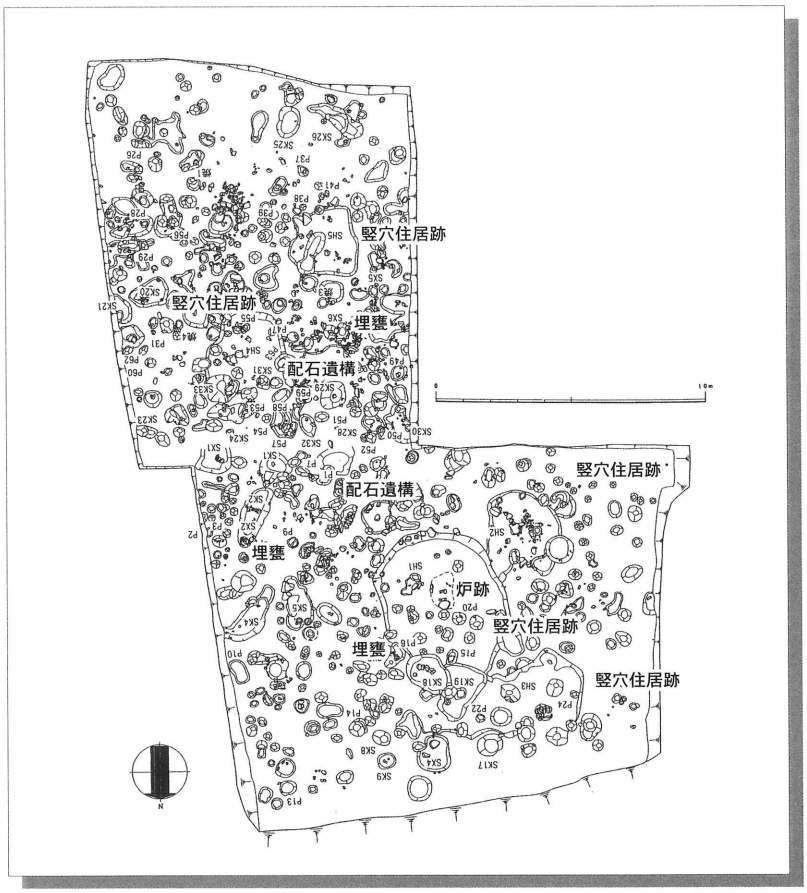


遺構検出状況

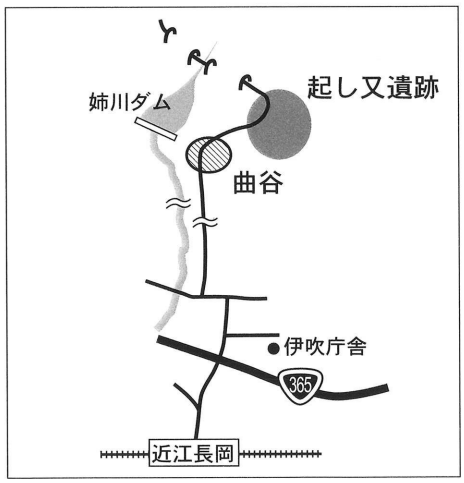
出土土器

埋め甕

配石遺構



検出遺構平面図



起し又遺跡

■ 所 在 地　　滋賀県米原市曲谷

■ アクセス　　JR東海道線近江長岡駅下車。バス利用。
※現況は水田です。

米原市教育委員会

滋賀県米原市長岡1050-1　TEL.0749-55-8020

平成24年度 市内遺跡保存活用事業